広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島大学教育学講座のあゆみ３ ： 山﨑博敏教授の語りから
Author(s)	山﨑，博敏；鈴木，理恵；曽余田，浩史
Citation	教育科学 ， 32 ： 41 - 63
Issue Date	2020-03-01
DOI	
Self DOI	10.15027/49150
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049150
Right	(c) 広島大学大学院教育学研究科教育学教室
Relation	

広島大学教育学講座のあゆみ３

― 山﨑博敏教授の語りから ―

山　﨑　博　敏
（聞き手：鈴木理恵・曽余田浩史）

鈴木理恵（以下Ｓ）：あの，先生の教育学部に入られてからの45年間という，長い，ほとんど半世紀におよぶ歴史についてうかがっていきたいのですが，その前にまず高専（高等専門学校）に入られていたというところからうかがっていきたいです。

山﨑博敏教授（以下Ｙ）：（中学校）３年生の時に熊本市内の県立高校と佐世保高専の２つに志願書を送りました。当初は腕試しのつもりで受けたんですけど，合格してしまったものですから。入試は２月25日だったかな。ちょうどエンプラ（エンタープライズ）が佐世保に入港した時で，デパートの屋上からみると全国から集った何百人という学生が基地に向けて大蛇のようにデモ行進をしていました。３月になって高専から合格通知が来ましたので熊本の高校の入試には行きませんでした。

Ｓ：先生は高専の……

Ｙ：３年で辞めなくて５年までいました。大学受験の勉強をしていませんでしたから。

Ｓ：いちおう卒業されてこちらを受けられたということですよね？　高専は電気だったんですよね。またどうして電気というのは？

Ｙ：中学校のころからラジオやアンプを自作していましたので，電気は嫌いではなかったです。でも，それを職業にしようとすれば会社にはいる人生，それはそれでひとつの道なんですけどね。

Ｓ：この前の最終講義では，サイン，コサインとかばっかりの授業に飽きたというようなことを……。
Ｙ：辟易していたことはあります。そういう職業に就くことに抵抗がありました。
Ｓ：それで，人間の研究をすることに興味が向いたというのは？
Ｙ：工学部にはいることもあったと思いますが，将来勉強するのなら文系にしようと思うようになりました。
Ｓ：中学生の時には一切そういうことは考えられなかったんですか？　あの，教育学部というのは？
Ｙ：その当時はそこまで細かく考えていませんでした。
Ｓ：人間の研究がしたいというところで，教育学部というのは，なんか，やはり教員になりたいというような？
Ｙ：研究者になりたいと思ってました。同じ勉強するなら。
Ｓ：それはいつごろ？
Ｙ：大学入試を受ける前です。
Ｓ：じゃあ，高専の４年生５年生の頃ですか？
Ｙ：そうですね，４年生の頃。
Ｓ：だって，高専に入られた時にはそんなにあまり将来考えておられなくて，まあ会社に入るというようなことで入って……。
Ｙ：大学受験する前に学部学科を決めました。
Ｓ：なにか，きっかけはあったんですか？　研究者になりたいという。
Ｙ：心理学や教育学の本を読んでおもしろそうだったからです。佐世保市の大きなアーケード街の本屋さんに受験参考書をよく買いに行きましたが，ついでに岩波新書を買って読んでみると面白くなりました。教育学を勉強すれば立派な人間になるだろう，と（笑）そういう幻想もありました。
Ｓ：広大の教育学部に入られる時からもうすでに研究者に将来はなろうと，なりたいと……
Ｙ：そうですね。なれればなりたいと思ってました。
Ｓ：そして，えっと，広島大学の教育学部に入られたのが20歳？
Ｙ：そうです。卒業してから来ましたから。運良く入れました。受験勉強はほ

とんど我流でやりました。英語の単語集から受験参考書まで全て自分で選び，自分で勉強しました。

Ｓ：高専がやってくれるわけじゃないし……（笑）

Ｙ：勉強時間が少ないので，後ろの席にしてもらってこっそり内職していました。古文とか漢文は１，２年生の時に勉強しただけですので。

Ｓ：高専の周りの方々が大学を受けられるにしても，理系，工学部とか理系の方に行かれる方が多かったんじゃないかと思うんですけど。

Ｙ：編入試験を受けて工学部に行く人が４～５人ですかね。160人いるんですけど。卒業して大学入試を受け１年から入学する人は２～３人ですかね。……僕は運よく教育学科に入学し４年間過ごしましたが，途中でたまたま理系的な安田三郎先生の社会統計学や多変量解析の授業を受けました。そこで社会移動の研究など社会学という学問を知り，その後に教育社会学を知りました。教育学科の図書室に行って新堀先生の本を読んでみると面白い。教育社会学ってこういう学問なんだ，自分に合ってるなあと思いました。

曽余田浩史（以下Ｄ）：最初から新堀先生をご存じだったわけではないんですか？

Ｙ：いや全然。大学のどこかですれ違ったときに，あの先生が新堀先生だ，それぐらいしかなかったですね，１年生の時，先生が教養で教育学の授業をされておられましたが，僕はなぜか聴講しませんでした。で，３年生の頃，方法学に出入りしていました。

Ｓ：大学に入ってこられた時には特に方法学をしたいとか教育社会学をしたいとか……

Ｙ：そこまではなかったですね。最近の人は，推薦入試の面接で，比較（比較教育学）を勉強したいとか，よくしゃべるでしょ。私たちの時代は赤本しか情報がないですからね。

Ｓ：当初，方法（教育方法学）に出入りされていたというのは，方法に最初決められたのはどうして？

Ｙ：あの頃は研究室紹介や卒論構想発表会もなかったし，研究法や課題演習などの授業もなかったです。僕は１年生の時，チューターだった吉本先生の教育学概論という授業を受け，明治図書のご本を精読し感銘を受けました。それで

教育方法学に出入りしていました。先生の研究室を訪問したのは２回くらいです。先生は昭和何年に入られました？　文学部ですよね？
Ｓ：私が出たのが64年，平成元年です。
Ｙ：そうすると，院生時代に僕が講師だったんでしょうかね。
Ｙ：その頃は卒論などの行事をしっかりと行っていましたね。
Ｄ：それまではそうではなかったのですか？
Ｙ：と思いますけどね。
Ｄ：私が58年度生なので，だから……
Ｙ：その頃はなんか研究室でやってましたよね。
Ｄ：そうですね，はい。
Ｙ：その頃はどうだったんですか？
Ｄ：構想発表会もちゃんとありました。３年生の時にありました。
Ｙ：私は，片岡先生に文句を言ったんですよ。入学式のときの写真もないし，全員での写真，集合写真もないし，卒業する時もちゃんとした写真もありませんでした。そんなことを最後の卒業のときに言った記憶があります。そのあたりがきっかけになってるのかもしれません。
Ｓ：じゃあ，かつては今のように入学してすぐの教員との対面のようなものとか……
Ｙ：それはありましたが，写真は撮ってなかったです。歓迎会の写真もないと思います。
Ｓ：先生の頃は１学年何人だったんですかね，学生定員は？
Ｙ：ええと，25人だと思います。
Ｓ：そんなに少なかったんですか？
Ｙ：あっ30人かな。30人で心理が25人だったと思います。
Ｓ：学部生の頃のなにか特別な思い出とか？　同級生との間の……
Ｙ：ありますけどね，誰かの下宿を訪問するというような交流ですかね。
Ｓ：仲はよかったですか？
Ｙ：悪くはなかったと思いますけど，クラブ中心の人，それから同級生との交流が中心の人とか，今と同じようにね。進路が多様だったので卒業してからなかなか会えませんしね。私の学年は卒業後すぐ大学院に進学した人が少ないん

です。１，２年遅れで入る人もいました。
Ｄ：それは，遅れるのはどうしてですか？　試験で落ちるという……
Ｙ：卒論を書いてないとか，就職が決まっていなかったんじゃないですかね。当時はいわばば放し飼いでした。昔は今のようなしくみがなかったんですね。
Ｓ：で，そういうなかで，最終講義でも「止まり木がない」学部生っていう……
Ｙ：そうです。今は行事も組織立って行われるし，課題研究とか卒論指導の授業があるでしょう。
Ｓ：そうすると，帰属意識のようなものっていうのはできなかったんですか？
Ｙ：そうかもしれません。大学に学部生のたまり場がありますが，行く人と行かない人がいます。私は行くのがなんとなく恥ずかしいというか，用事があったら行くという感じでしょうかね。
Ｄ：学部時代から見ると，教育社会学研究室，我々の頃はもう，月月火水木金金みたいなかたちで，かなり共同研究で忙しい研究室だというような，そういう意識だったんですが……
Ｙ：ええ。
Ｓ：それは，でも大学院になってから，先生はそういう共同研究に……
Ｙ：そうですね。学部生は参加していませんでした。
Ｓ：卒論は，えっと，だから，教育社会学で書かれたんですか？
Ｙ：いいえ，それはあまりしゃべりたくないですが（笑）。５月か６月ころ，９月の大学院の入試に受かったら研究室を変えたいと片岡先生のお部屋を伺いました。当時，片岡先生は助教授で学生に近い存在で，私は演習の授業を受けたことがありました。しばらくして新堀先生のお部屋にご挨拶に行きました。
Ｓ：卒論のタイトルは？
Ｙ：「教育学におけるサイバネティックス的方法」というものです。それは廃棄してもらいたいんですけどね。吉本先生から最初の面会時に東ドイツの本を渡されていました。私の経歴をご存じだったのかもしれませんけど。
Ｓ：大学院に入いったら教育社会学っていうふうに方向を変えられたのは，やはり総科で受けられた社会学の授業が……
Ｙ：はい。研究室に出入りしているとなんとなくその研究室の研究スタイルが

わかります。それと，安田先生の授業の影響を受けて，社会学として研究が成り立つということで。もともと高専の学生で理系ですから，実験のレポートを毎週出していました。そういうことは慣れていました。
Ｓ：じゃあ，やっぱり，もともと先生がお得意の分野の，その理系的な数字を操ったりするようなのを……
Ｙ：はい。それで生きていけると。教育社会学を勉強するとそういう研究ができることが分かった。開けた感じ，ですかね。
Ｓ：で，大学院に入られて，大学院の時にはさっきお話が出た共同作業が？
Ｙ：そうですね。そうそう，「作業」ですね。
Ｓ：日々，ですから，毎日のように作業をされて特別研究でそれを発表される？
Ｙ：僕にとってはすごく楽しかったです。まず，大学の中に行く所があります。院生が過ごす部屋があります。院生室では広い机に並んで仕事をします。私が入った頃は電卓をたたいて計算していました。集計表にいったん転記した数字を電卓で計算し，平均値を計算するなどの仕事が多かったです。グラフを作るのも一日がかりでした。その後，大型計算機の時代があり，1980年代に入るとパソコンが入ってきました。Ｍ２のころ，大型計算機を使って共同研究のデータを主成分分析を行いました。
Ｓ：それは，やはり興味がおありになったから？
Ｙ：そうですね。高専の時の統計学の授業はすごく難しかったんですよ。先生が九大の数学科出身でしたから教科書も授業も抽象的でした。広大入学後の教養１年の統計学は文系の統計学だったので数理的ではなく，経済学部の統計学も難解でなかったです。３年生のときに総合科学部の安田三郎先生が社会学に応用する統計学の授業を２つほど開講されており，一生懸命に学習しました。
Ｓ：大学院の時の，その，研究室での作業っていうのは，何人ぐらいの院生が？
Ｙ：んん，５～６人ですかね。
Ｓ：どういう分担のしかたなんですか？
Ｙ：ドクターの最上級生の方が，仕事の割り振りと調整をされていました。
Ｓ：同じような仕事の分担なんですか？　内容は同じでそれをほぼ均等に割るような感じで？
Ｙ：ある程度は分担していました。いろんな資料や分析の方法がありますから。

Ｓ：それは毎週，週単位でというか，新堀先生から？
Ｙ：金曜日の午後が特研でした。片岡先生の研究会もありました。
Ｓ：そこで発表されて，次の週の課題はその時にもらうような感じですか？特研はそういう共同研究の成果発表というか……
Ｙ：それが半分ですね，あとは個人研究。ウエイトとしては半分以上は共同研究の方ですかね。４月から初めの頃と年末は個人発表，学会シーズンは８月，９月ですね。
Ｓ：それは，毎週金曜日の午後の半分が作業報告，半分が個人研究というわけでもなかった？
Ｙ：多少そういうふうになってました。でも，やっぱり秋の学会の直前，10月くらいまでは共同研究が主になりますね。11月の中四は個人研究で発表します。
Ｓ：そうなると，院生も，今度，何々学会でこういう発表をしますのでっていうような報告を……
Ｙ：そうですね。学会発表の申込みが６，７月ころでしたから。その時に，どういうテーマで，誰が発表するのかとか……ですね。
Ｓ：やっぱり，レジュメを，学会に向けたレジュメを作って，それを先生方の前で，院生の前で発表するという形式ですか？
Ｙ：学会のレジュメは，大会の直前ですね。
Ｓ：新堀先生のご指導というのはどんな？
Ｙ：あまり直に，ああしなさいこうしなさいとは言われなくて，ぼそぼそと，ここはこうようにしたらといいんじゃないかというようなコメントが多かったですね。大きなテーマは先生が決められますが，具体案はみんなでアイデアを出し，最後にこのようにしようと言われておれらました。大学院入学当時は日本の教育地図という研究が終わったところで，教育病理がテーマでした。そのなかで学校の欠席とかいじめ件数などいった県別の統計データを用いて，各県の特性を分析しました。それと並行して，ドクター演習ではアカデミック・プロダクティビティーのテーマで実証研究がありました。私はマスターの時に授業に参加し，ドクターに入ってからも行いました。
Ｓ：じゃ，院生が個人研究も，まあ新堀先生や先生方のその当時やっておられたことに……

Ｙ：それに合わせる人もいたですね。
Ｓ：合わせなくてもよかったんですか？　必ずしも合わせる必要はなかった？
Ｙ：はい。当時は人物研究が多かったんですね。デュルケームとか，パーソンズとか。だから君は何を研究してるのかと質問されると，「私はパーソンズをやってます」とか答えていましたね。先生からは基礎的な理論を勉強するように勧められました。もちろん，自分のやりたい研究テーマに近い偉大な社会学者を選びます。学級集団を研究する人はホーマンズの研究など。テーマを自分で考えた人もいました。私はＭ１の時，「君はドイツの教育社会学をやったらどうかね」と言われました。その後は何をどのように進めるか悩みました。当時は，シェルスキーの『大学の孤独と自由』の翻訳があり，それを中心に書きましたが，ドイツでの研究の全体がなかなか分からず，向こうの文献や教科書などを読んで19世紀末以降の教育社会学の流れをまとめて，何とか修論を書きました。恥ずかしいです。本当に。中途半端で。
Ｄ：個人研究でわりと理論研究を大切にしていた感じですか，その当時。で，共同で実証の方を？
Ｙ：そうですね。共同研究は実証研究ですが，個人研究では有名な学者の分厚い著書を研究するというスタイルです。私は，大学教育研究センターに助手として入った後，新堀先生の共同研究の実証研究の元となった科学社会学や高等教育の原書を自分で勉強しました。科学社会学，アカデミックマーケット（大学教授市場）などです。たくさん買いまして，ボーナスを全部，外書につぎ込んだ時もありました。
Ｓ：もう大学に入いられた時から，研究者になりたいというお気持ちだったら大学院に入るのは当然のことで？
Ｙ：そうですね。受かるなら上位で受かろうと思ってドイツ語を勉強しましたよ。高専の時もドイツ語ありましたけど。
Ｓ：高専の時もドイツ語を？
Ｙ：そうそう，その時の授業を担当されておられた先生がつい半年ほど前，ここに来られました。
Ｓ：博士課程後期に入られるのはもう自然の流れで上がられたんですよね。
Ｙ：マスターからドクターに行く時に，今の学生のように悩まなかったですね。

研究の仕事に就こうと思っていたからじゃないですかね。あの頃は，修士を出て就職する人は少なかったですよ。
Ｓ：じゃあ，修士まで行ったらもう研究者になるという感じだったんですか？
Ｙ：はい。就職もよかったし，奨学金も教育職につくと返済しなくてもよかったですから。
Ｓ：でも，その，先生としては統計とか数字を扱う実証的な研究手法に魅力を感じて教育社会学に入られたのに，一方で，あの，やれって言われたというか，修論でされたのは理論的な研究で，そこで，自分のやりたいことはこれじゃないのにというような……
Ｙ：それは，ないことはなかったです（笑）。でも共同研究でそういう研究はやっていましたし。僕は統計が他の人より知識があったので，そこの部分の仕事が担当になったんですね。でも個人研究はまだ軌道に乗っていませんでした。
Ｓ：じゃあ，研究者になることに一回も迷いはなくもう順調に……
Ｙ：そうですね，大学院に入ってからはなかったです。
Ｓ：まわりもマスターに入られた方々みんなそういう感じのなかにおられた？
Ｙ：はい。
Ｓ：後期に入られてわずか半年で助手になられたんですよね。
Ｙ：ドクターに入った後，アルバイトに誘われましてね。当時の大学教育研究センターの関先生がちょうど大きな科研をとられておられました。全国調査を始められた最初の年度だったと思います。新堀先生の共同研究で行っていたような統計的な集計表の作成の仕事をしました。学校基本調査を使った大学や学部の数や学生の数とかですね。今だとエクセルで行うような仕事をしました。その後，助手の募集がありました。
Ｓ：じゃあ，大学教育研究センターでアルバイトをしていたところに，ちょうど，あのー，公募があったというところで……
Ｙ：今のような全国公募じゃないですけどね。学内と客員研究員に公募書類を配布するので，全国公募に近いでしょうか。
Ｓ：もうちょっと学生として勉強してみたい，研究してみたいというようなお気持ちは？
Ｙ：その時はまったくなかったです。給料をもらって研究させてもらえるとい

う感じでした。雑務とプロジェクト研究で半日くらい，夕方は自分の勉強をしました。研究会もありました。
Ｓ：恵まれた環境だったんですね。
Ｙ：そうですね。あの６年半は給料をもらって自由に勉強ができた６年半です。ドクターは途中で中退しましたが，ドクター３年の２倍以上の６年間半もお世話になりました。
Ｓ：順調ですよね，ずっと，もう本当に。
Ｙ：そうですね。順調でしたね。院生には，就職が早い人遅い人がありましたが，私は早かったほうです。
Ｓ：今，Ｄ３までっていうのはもう当たり前。当時はＤ１，Ｄ２でどんどん出て行かれてたんですね。
Ｙ：そうですね，Ｄ３まで行って助手をする人もいましたが，Ｄ１やＤ２で就職する人も多かったです。当時，ドクターの入学定員には研究室ごとの上限があったんですよ。１研究室で４人でした。ですからマスターの同級生２人いた場合に２人とも行けるとは限らない。
Ｄ：われわれのときも１人しかあがらなかったです。
Ｙ：ですから，ドクターに進学しなかった人が１年間助手になるケースもありました。
Ｓ：大学教育研究センターでは，研究としてはどういう研究を？
Ｙ：当時のプロジェクトは，関正夫先生が科研の総合研究Ａをとられ，大学の工学教育の調査研究をしておられました。私のメインの仕事は，全国大学教員調査の調査票の作成，発送からデータ分析，報告書執筆で，３年くらい続きました。あと，喜多村和之先生の大学の国際化というプロジェクトが走っていました，大学教員調査や学生調査もしておられました。調査票作成には助手の大塚先生と講師の馬越先生も協力されていました。調査データの分析の段階になって，私はお手伝いをしました。数表は私が作成し，それを使って先生方が各章を執筆されるという感じですかね。報告書では研究の方法という章か節を２～３頁分担しました。
Ｄ：このセンターのスタッフ，すごいですね。
Ｙ：そうですね。あの頃が一番のピークだったかもしれません。講師以上の先

生は４人しかいなかったんですけどね。喜多村先生は大学のティーチング，大学の淘汰などの研究も開拓され，センターの研究は全国に大きな影響を与えました。その後，矢野先生も赴任され，部門数はすぐ大きくなりました。この時めざましい研究をしていたので，４人がいなくなった後に高等教育研究センターが21世紀 COE をもらえたと僕は思っているんですけどね。

D：あの，なんか，もっと大学をこうしたいとか，ミッションとか志みたいな，なにか雰囲気というのはどういう感じだったんですか，大学教育研究センターの？

Y：ここは，日本の高等教育を研究しているところで，成層圏飛行をしていると言われました。

D：成層圏飛行？

Y：そうそう，当時，学生部長と学長を務められた沖原先生の言葉です。大学紛争後，大学に設置された改革委員会などで，学部や大学の改革案が出され，学内通信に掲載されました。改革案をつくるためにケンケンガクガク議論をしていた若手の先生が大学教育研究センターによく出入りされており，関先生はそのような方の窓口にもなっておられました。しかし全体としては，センターは高等教育の研究に力を入れ，広島大学の改革にはそれほど大きな貢献はできなかったと思います。それで，沖原先生からセンターは成層圏飛行をしているということばが出たわけです。

当時は，センターで行っている研究テーマは斬新でした。喜多村先生が雑誌『IDE』に寄稿された論文が読まれ，高等教育の学会がまだなかったのでセンターの研究員集会には「全国から多数の研究者が集まり，そこでのテーマや講演や発表が，高等教育研究の新しい研究テーマや流行を作り出すという役割をしていたと思います。

私が入った後，教育社会学者がだんだん増えてきました。丸山文裕先生がミシガン州立大学の学位取得と同時にセンターに着任され，国立教育研究所から矢野眞和先生が赴任されました。センターの高等教育の研究が，調査研究を主体とするようになってきたんですね。新堀先生がセンター長になられたのも，センター側の変化が現れていると思います。

S：先生ご自身の個人研究としてはどんなことを？

Ｙ：個人研究は，ドイツの高等教育については修論で少しかじりましたが，ドクター進学後，助手２年目くらいまでに修論に書けなかったテーマについて３本くらい書きました。また新堀先生の共同研究でかかわった「アカデミック・プロダクティビティーの研究」では，調べたところ，欧米で古くから統計学者などによる多数の研究がありました。助手３年目くらいの時，当時の最先端のアメリカの研究までの先行研究をまとめた論文を書きました。その後，科研を得て日本の化学者の論文数と引用数のデータを自分でとり，科学の生産性と報賞体系の研究として論文を書きました。当時のマートンの弟子たちの博士論文と同じレベルを目指して分析しました。

センターにいたお陰でプロジェクトがらみで高等教育の多くの研究に参加させていただきました。さまざまなテーマにかかわることができました。その中で，自分の研究として深めたいと思ったテーマは，大学のティーチング，大学の組織社会学，新制大学，私学高等教育などです。

Ｓ：お若いし，いろんなテーマ，多岐にわたって……

Ｙ：そうですね。天野先生が東大に帰られてしばらくすると，同年代の人たちが活躍されます。

Ｓ：最終講義の時にうかがったのでは水曜日に，あの，読書会をされていた？

Ｙ：そうですね，６年近く続いたんじゃないでしょか。矢野先生が来られてから，教育経済学の書物の輪読会に参加しました。ブローグというイギリスの教育経済学者が書いた難しい英語の原書本を毎週水曜夕方に，１人が１章分を紹介して矢野先生がコメントする形でした。理解できる限りでレジュメを作って発表しました。20章くらいありますから毎週やると半年くらいで終わります。２回目は速かったです。あとは労働経済学の翻訳教科書を２冊ぐらい読みました。ベッカーの『人的資本』も２回やったかな。

Ｓ：それはセンターの先生方全員が参加されるわけではない？

Ｙ：いえ，私的なものですから，私と丸山文裕さん，それに後になって当時修道大学に居られた小林雅之さんも参加されました。

Ｓ：修道大学から来られてたんですか？

Ｙ：はいはい，千田町ですからね。

Ｓ：それ，翻訳されたのは出版されたんですか？

Ｙ：いえいえ，翻訳書の各章を読んでレジュメにして紹介する研究会です。あの頃まだワープロが普及していなかったので手書きですけどね。
Ｓ：たいへんな……
Ｙ：そうですね。３人ぐらいで回ってますのでね。だから当然，本を読む訓練にはなりました。２回目にはかなりわかるようになりました。
Ｓ：せっかくなら出版されればよかったのに，そんな話にはならなかったんですね。
Ｙ：で，その後に助手を中心に英文雑誌論文を紹介する研究会もやりました，２年くらい。
Ｓ：じゃあ，濃密な６年半の助手時代だったんですね。
Ｙ：そうですね。この時，一番よく本を読みました。そこの棚にあるんですけどね。
Ｓ：センターでは，授業は全然持たれなくて？
Ｙ：なかったですね。ただし私立短大に２年くらい非常勤に行ったことはあります。また片岡先生の研究会に呼ばれて，統計などで院生にコメントすることもありました。
Ｄ：私，山﨑先生の授業を受けたことがある。たぶん，統計かなにかで，矢野先生とオムニバスみたいな形だったかなと……　学部（の時）だと思います。
Ｙ：片岡先生が教育統計学の授業を作られ，矢野先生にお願いしました。授業の最初の数回は矢野先生が担当され，その後は私が担当しました。
Ｄ：Ｘの０乗は１ということから始まって……
Ｙ：それが最初かもしれませんね。行政の研究室も喜多村先生に修士の教育行財政演習の授業をお願いしていました。私はその時に授業を聴講し，喜多村先生に初めてお目にかかりました。
Ｓ：昭和61年に教育学部に講師として戻られたということなんですが，そのあたりの経緯は？
Ｙ：公募があったので応募したというところですかね（笑）。
Ｓ：ほかの大学とかではなくてやはり……
Ｙ：ほかにたくさん応募していましたよ。でも落ちました。教員養成系の大学では高等教育の研究はあまり関係ないんですね。それで６年半も長居してしま

いました。
Ｓ：広島大学教育学部に戻られたのが昭和61年，先生がまだ31，２？
Ｙ：そうですね，86年ですからね。30台の前半……
Ｓ：その時におられた先生方が，どういう先生方が？
Ｙ：そうですね。最初の１年目は……。文理大出身者では方法の吉本先生，行財政の名和先生，経営の岸本先生がおられました。沖原先生もおられました。
Ｄ：沖原先生が学長の時……
Ｙ：学長になられていたと思います。講座会議には出席されておられませんでしたから。その後，平成元年８月に移転したときは，新制広大出身者の時代になります。移転直後は，哲学は小笠原先生と坂越先生，日東は三好先生と大林先生，西洋は池端先生，教育社会学は片岡先生と山崎，方法学は恒吉先生，社会教育学は池田先生と佐々木先生，比較は吉田先生と二宮先生，行政は上原先生，経営は青木先生と岡東先生でした。
Ｓ：そうすると，そのなかで同じような年代というと，今井先生ぐらいですか？大林先生がちょっといくつか離れている？
Ｙ：そうです。大林先生は２つか３つ上で，学部学科のことを教えてくださいました。あの頃は，多くの研究室で教授と講師の間が18から20歳くらい，最高で22歳，それぐらい離れた人が採用されたんです。ですから師弟関係にある人ばかりで，教授と，助教授・講師の間にはおおきな段差がありました。
Ｓ：ちょっと想像もつかない世界ですね。
Ｙ：そういう年数が離れている研究室が多かったですね。
Ｓ：さすが数字に強いですね（笑），よく覚えておられる。
Ｙ：その頃の数字は覚えています。
Ｓ：講座会議の雰囲気とか？
Ｙ：私ではなくて，1980年代初期に新堀先生が書かれたエッセイがあります。それは，当時の講座会議を描写しています。大学教育研究センターの『コリーグ』だったと思いますが，動物になぞらえて書いておられます（笑）。それぐらい激しかったらしいです。
Ｓ：新堀先生はどっちかというと冷静沈着に……
Ｙ：たぶん。在職中の会議の風景はお見受けしてませんけども。片岡先生は助

教授のときからよく発言されたと聞いています。
Ｓ：じゃあ，講座会議のなかでは講師の若い先生方はじっと静かにしているという感じですか。
Ｙ：そうです。
Ｓ：それで，えっと講師になられてまもなく移転がありますよね。
Ｙ：そうです，私が赴任した時は移転のスケジュールが確定していました。教育学科は平成元年８月に引っ越しました。学部の移転の委員長は三好先生でした。赴任した昭和61年には，新キャンパスの建物の部屋割りを決めました。スパンを何メートルにするかによって，小さな部屋を多数つくるか大きな部屋を少なく作るかという選択がありましたが，最終的には真ん中になりました。東千田町の旧３階建ての建物は教官室の面積がとても広かったですが，新キャンパスの建物では狭くなりました。その代わり，教育学講座共通の図書室は広くなりました。また，「実験・非実験」の研究室で面積をどうするかも当時の法令上では基準面積に違いがありましたが，実際は平等になりました。
Ｄ：移転当初，こう，教育学をもっとこういうふうにしたいとかいう，夢とか，そういうビジョンみたいなものはなんか話し合われたんですか？
Ｙ：あの頃は統合移転までに全学博士課程設置というのが大学全体の目標でした。教育系で持ってないのは学教だけでした。福山分校は，移転のかなり前の沖原学長時代に東千田の教育学部と組織上統合しました。
Ｄ：確か，それまで社会教育学の研究室，なかったですよね。
Ｙ：そうですね。その時に社会教育研究室ができ，教育学大講座の一部になりました。池田先生と佐々木先生はこれを期に，社会教育学の担当になられました。
Ｄ：だから，福山が一緒になるということがひとつ大きなことだったんですね。
Ｙ：そうですね。その後は平成12年の学校教育学部との合併ですね。僕はあの時にワーキンググループのメンバーでしたが，結局，当時の両学部の学部長が工学部のように学部を１類から５類までに制度化しました。
Ｄ：なんか，当時は考えてたんだけど，今，実現，結局できなかったなあというのは何かありますか，その時のアイデアで……
Ｙ：どうなんでしょうね。東千田町の教育学部，特に教育学講座は移転前にす

でに博士課程後期を持っている組織なんですね。ですからこれ以上欲しいものは制度的なものではなく，質的なものではないでしょうか。逆に，持っていなかった学部のほとんどは移転までに博士課程を設置しました。学校教育学部は移転後の平成12年度の学部統合時に博士課程が完全に設置されました。翌13年度には部局化し，教育学部と学校教育学部は制度上では並んだことになります。文理大時代以来の教育学講座の独占的な広島大学の内外での地位は平準化されたといえます。この意味では，過去から販売していた商品を学内の他組織も販売するようになった結果，教育学講座の希少価値は下がったかもしれません。大学全体では売り場面積が増えたことは良いことですが，教育学講座は特色ある商品を販売する必要があると思います。

西条移転すれば東千田キャンパスの劣悪な研究環境はよくなると信じて移転の準備をしました。移転後，実際に大きく改善しましたが，その後21世紀に入るころから教育界には逆風が強くなりました。学校教員への就職が悪化した結果，2000年度に実施された教員養成入学定員5,000人削減計画で広島大学は大きな影響を受けました。旧学校教育学部の小学校，中学校，特殊教育関係の教員養成課程350人がほぼ半減した形で２学部が統合しました。1990年頃の臨時増募時代に740人くらいあった入学定員は，その後500人を下回りました。移転後は食堂は学生でいっぱいで昼休みの行列も長かったですが，随分緩和しました。

Ｓ：昼休みの短い時間にね……　ちょっと話がもどりますけど，教育学部が移転した時に先生もすぐに広島市内からこちらのほうに住居を移されたんですか？

Ｙ：そうです。通勤がたいへんでしたんでね。

Ｓ：じゃあ，あのー，何か月間かは通われたんですか？

Ｙ：ちょっととだけ通いました。僕は海田の公務員宿舎に引っ越していました。

Ｓ：移転が決まって，海田に一度引っ越されて，それから東広島？

Ｙ：海田は西条に近いし，公務員宿舎で家賃も安いし。

Ｓ：でも，通ってみるとやっぱり遠いということで？

Ｙ：はい。移転前に西条に何回か実地検分で来ましたが，まだブールバール全部できてませんから通勤時間がかかりました。

Ｓ：移転してからの大学での生活というか，研究生活というのは？
Ｙ：大学のキャンパス周辺は，平成５年迄の数年間で大幅に変わり，ほぼ今のような状態になりました。
Ｓ：最初は何もなかったんですよね。
Ｙ：ブールバールは国道２号線バイパスの高架から警察署近くの交差点までの区間が開通しておらず，ひどい時はバスで１時間くらいかかっていました。その頃，下見のダイエーと土与丸のゆめタウンができ，買い物客の車で国道の渋滞がひどかったです。
Ｓ：一般の生活をするのにもまだ環境が整ってないし，研究生活も？
Ｙ：学内の研究のハード面はよくなりました。教育学科の図書室は東千田時代に比べると３倍くらいになりました。各先生方のお部屋にラベルが付いた本がたくさんあり，学生が借りに来ても教員が不在の時も多かったですが，移転後，教官室への図書の配架を少なくし，それ以外の本は教育学科の共通図書室や中央図書館に移管しました。
Ｓ：図書館に本があるとしても，本を買いたいと思った時に近辺に大きな本屋さんがないとか，今はネットで注文すればすぐに手に入りますけど……
Ｙ：そうですね。あと，郵便局が近くになくて不便でした。私は教育関係団体の庶務を引き受けていましたが，速達や小包の発送で安芸西条郵便局までよく行きました。夜８時までに行かなればけならない時に下見経由でタクシーを飛ばして行くこともありました。薬屋さんもありませんでした。ですから，近くに郵便局とダイエーが出来て，ブールバールが全通した平成５年ころにはすごく良くなりました。
Ｓ：その平成５年に先生が博士論文を書かれた？
Ｙ：そうです。その頃はすべてが急速に良くなった時期です。基盤整備も進むし，残りの学部の移転も完了しました。ただし学生はストレスが多かった時代ですね。クラブ活動や教養課程の授業，さらにはアルバイト先が広島市の学生も多かったです。１年生が設備の関係で専門の授業を聴講するために西条に来ることもありました。そうすると，２号線でバイクが倒れて怪我をしたり，死亡することもありました。自殺も多かったです。いつの間にか自殺が少なくなりましたね。平成元年に来てから10年くらいして落ち着いたんでしょうね。

Ｄ：そういうことに気づける人も今は少ないと思います。
Ｙ：私は61年に採用されたときにすぐ博論の準備を始めました。日本教育学会に入り，投稿して掲載されました。平成５年に博士号を取得できました。
Ｓ：移転とかそういうのが重なる時期で……
Ｙ：でも移転してからは楽しかったですね。移転後，安原先生，深澤先生，河野先生をはじめ，若手の先生が赴任されました。岡東，二宮先生は移転後，教授に昇進されました。2000年の学部統合と翌年の部局化で，大きく変わります。一つは大学院の個人指導体制があります。助教授・講師も博士後期の特別研究の有資格者になり，研究指導を行うようになりました。
Ｄ：前は講義といったら教授が講義をして……
Ｙ：私が入った時，ある教授から若い人は教職の授業はしなくていいです，僕たちがやるから研究しなさいと言われました。学生を指導する前に研究業績や学位を早くとも言われました。
Ｄ：今だったら考えれない世界が……
Ｙ：昭和１桁の人は早く学位をとってる方が多いです。新制広大の大学院博士課程ができた頃，昭和30年代の半ばには課程博士が多いです。その後，大学紛争が原因なのかわかりませんが，課程博士が減少します。そして私たちの時代になると，課程博士の取得が再び強調されるようになりました。
Ｓ：上からというか，ほかの先生方から取れというプレッシャーというか……
Ｙ：それは当たり前のことなんですけどね。指導する人が持っておかなければならない。大学院重点化のころになると，設置申請の書類を出さないといけなくなりました。
Ｓ：博士号をとられて実際，大学院生を指導できるお立場になられて……
Ｙ：片岡先生の時には，片岡先生が指導されておられました。
Ｓ：山﨑先生が，先生ご自身が院生の時には，教授の先生方から請け負ったというか指示された作業をされて特研で発表されるというような共同研究……
Ｙ：はい。それで私たちは研究のしかたを学びました。
Ｓ：先生が逆に，教育学部の教員のお立場になって院生を指導するようになられてからは？
Ｙ：なってからはそういうことはできにくくなったですね。一番のきっかけは

外国人留学生の増加ですかね。留学生を入れて昔やってたような共同研究ができるかというとそうではありません。留学生は留学中に博士号を取得して帰国する必要があります。留学生は，通常，自国の教育を研究して論文を書きます。私たちは，留学生の出身国の教育を勉強しながら研究指導をすることになります。わかりやすい日本語で論文を書く必要もあり，推敲してあげることも必要になります。そうするとその人たちの研究指導は私たちにとってはプラスの仕事になるわけです。演習の授業も変わりました。英語ができない人もいますし，できても授業では日本語でレジメを作成し発表するのは大変です。ですから留学生には別メニューを用意する必要が出てきます。そのうちに修士の演習で日本語の文献を読むことも増えました。

昔の教授の方々は自分が展開，構想している共同研究を院生と一緒にやって，院生は作業をする中で研究者としての訓練を受けるわけですよ。レジュメの作成，学会発表，論文作成，最後は本にしてくださって，業績もできるしね。一連のサイクル，３年くらいの間に。院生は就職する時にも有利です。そういう共存共栄で，院生全員巻き込むことができなくなりますね。

Ｓ：片岡先生の時にはまだできたんですか？　片岡先生が……

Ｙ：できていたと思います。留学生も参加していましたが，当時は留学生の数は少なく，中国政府が派遣した留学生が主でした。21世紀になると留学生の数が急増しました。だから，人の問題じゃなくて，そういう時代になったわけです。20世紀の末になって中国からの私費留学生が大量に来始めたんですね。日本の国策や大学の利益にもなりますし。自分の研究は個人的にやるか，２～３人の日本人院生を中心に共同研究を行い，留学生は早く博論を書いて母国に帰る，そういうような形になりますね。留学生を巻き込んだら彼らは博論を書けませんから。そういう点ですごく変わりました。

Ｓ：変わりましたよね。

Ｙ：大学院教育は修士も博士も変わりました。ある先生はサービス業だと言われました。彼らが言ってきたテーマを研究レベルまでもっていってあげなくてはいけない。そういう意味での負担。まあ，でも引き受けたらしょうがない。新堀先生や片岡先生の時代は日本人院生が中心で。自然科学の研究室に近いと思うんですよ。

Ｓ：非常に効率的ですよね。
Ｙ：そうですね。上級生から学ぶこともできるしね。雑談のなかで得る情報って大きいでしょ。どの本がおもしろいとかね，これはこうするんだとか，仕事を早くするためのノウハウとか。今だと，パソコン，エクセル，統計ソフトの使い方とか，こうしたら早いとか。それが，個人研究になってしまうとなかなか学ぶ機会がない……
Ｓ：そうですよね。先輩から後輩へと受け継がれていくものがありますものね，そういう共同研究のなかで。
Ｙ：ぼくも数年間そういうやり方でしたけどね。学級規模の研究を２回ほど，メンバーは変わりましたけどね。大学院の学生がいたからこそできたと思います。それをもとにして博論を書いてほしかったんですけどね。心残りといえば，博士号を日本人にもっと出さなきゃといけなかったなと思っています。
Ｓ：あの，最終講義をうかがってて，ほんとうに山崎先生ってたくさんの数字を扱われたなと，100万人規模のデータを扱われた……
Ｙ：そうです。50歳を過ぎてから再びSPSSを使った分析を始めました。全国学力調査の100万人のデータは読み込むのにも時間がかかります。変数の数は1000以上もありますが，変数が表示される窓が小さく縦に10か15くらいしか見えません。1000以上の変数をスクロールして，右の窓に分析する変数を移します。だから目的の変数が前半部にあるのか真ん中にあるのかをよく頭に入れておかないといけません。仕事を時々やるとだめなんです。このような仕事を老眼が始まった55歳くらいのときにやりました。国のデータで，秘密漏洩の問題がありますから院生に頼めません。全部ひとりでやりました。全国学力のときは研究論文は少ないですよ。悪口いわれたかもしれません。平成19年から数年は忙しかったです。一番最初の第１回と第３回の学力調査のデータは結構詳しく分析しました。その後，沖縄県の学力調査データと連結したデータの分析を平成21年度と23年度の２回やりました。委託研究の申請書を作るのに時間を使いました。分担者の勤務大学から琉球大学までの旅費の計算に時間がかかりました。でもこれだけのデータを分析できる機会はないですからね。
Ｓ：そろそろ時間になってきたのですが，この長い広島大学教育学部の教員生活のなかで，先生ご自身が学生の時から俯瞰されて，学生の気質というかそう

いうので変わったなというのはお気づきの点はありますか。
Ｙ：大学生はそれほど大きく変わってはないんではないかと思いますね。ただ21世紀になった後，教員養成色が強い人が入って来たなという感じはしますね。どこの大学と併願して受けてるかということでいうと，昔とずいぶん違いますね。教員養成大学と兼ねて教育学コースを受験している人が増えました。
Ｓ：学生の気質というか気風というか，そういうものは？
Ｙ：バンカラが少なくなり，優等生が増えました。時代も違いますし，世代の違いもありますしね。
Ｓ：まじめさとかそういうのはそんなに変わらない？
Ｙ：今の大学生はもっとまじめです。一人っ子の時代ですし，高校で受験指導を丁寧に行うようになりました。オイルショックの後，就職難になって大きく変わりましたね。新人類と呼ばれた頃から変わってきたのではないでしょうか。それからもう２，30年経っていますね。しかし，ドクター，マスターに行かなくなりましたね。特にドクターに行かなくなったなあ，これはすごい変化ですね。
Ｓ：そうですね，研究者志望の学生が少なくなりましたね。大学院，前期に行っても前期だけで辞めてしまうっていうような……
Ｙ：教育学部が教員養成の学部としてマスコミから書かれることも一因ではないでしょうか。教育学系コースの区分が適切ではありませんと受験雑誌に電子メールを送ったことがありました。第５類は文学部とか心理学とか社会学とかそっちのほうの系統になります，と。
Ｓ：そんな長い歴史をご存じの山﨑先生がご退職されるのは本当に残念なんですけども，最後に教育学講座のわれわれ教員に向けて何か一言いただけますか？
Ｙ：そうですね，バランスじゃないですか，教育・研究・社会貢献と。教育も学部生の教育と大学院生の教育もありますしね。今は教育・研究その他の側面で評価とか点数とか，事務からいろいろデータの提出の依頼もあったり，たいへんな時代だと思います。でも，それぞれを過不足なくやっていれば乗り越えられると思いますよ。研究できる大学が少なくなったですから，期待されていると思います。研究時間を作ろうと思えばなんとか捻出できる大学だと思いま

す。どうぞ，みなさんのご活躍を期待しております。

Ｓ：長時間にわたって貴重なお話をありがとうございました。

Ｄ：ありがとうございました。